燕石雜志

一 関東方言
二 團頭
三 藪入
四 猴蟹合戰
五 桃太郎
六 舌切雀
七 花咲翁
八 鬼大手柄
九 猿猴生膽
十 浦嶋子

巻之四止

1 5
116
4

門 1 書 5
號 116
卷 4

東石雜志卷之四

口戸　蓑笠軒　瀧澤解　瑣吉述

(一)関東方言

いとくと今と同じくこゝろくの人の言葉さとれども古言の悉失たるもあり東のかさまの新古言の送りもあり大約伊豆相模より以東なる民間の今も語の通ぜざるをとゞめて〻あんざりのことのみちのくと同じくこの約ちなれば行とふとのふ義なり此りのことをいふことを都會の俗人笑ふめれど萬葉集などのとゝ

雜る歌ヨメ多くり亦とふとも読ヨメをたちつてとと通じくこゝろもたゝあるものゝべしこの

□□ちふとふを中葉ナカゴロより歌ヨミの耳ハ障カワるこゝろちふと読ヨメを亦もちとてと通カヨフていふ

のゝ古今集よりのちくの歌ハ至りてこゝろもちくちくべを青とそなれば□

あくなどゝむゆるすくさとあるれ文フミのめるべれをあべいをべををとべいと書カケ

ヨメオホりあんこいもりゆゆとのふ言葉源氏物語もえたる歌やゝ古言コゲンの今ハ

足立藏書

東のくさに送るをたくさるものい関東可とく笑ひめれどその笑ふ人を笑ふ
〻〻江戸の俗白物を罵るべらぼうとのべらも可なり古今集に可なり
らうと読るをえ〻〻たべ〻〻べとのいさとび云るふぬよびい〻云茶とく
とのさ〻年ものいつや〻とろはぐ亦武蔵下總田舎人をを明ものとん
ずるとき牧とふ江戸人いかとのいかを如何の義なるべる歌和とのいか語に京
草紙物語まも鞍ええ江れば何とらんとうるく〻ふ憂たく〻えるすぐとうと
俗い語のをりまいとのいかうぐふ〻とのいかを常のくるとと江戸人いくまの
とんかくるとるれりとのいまみむめもと通ひるるりもりもうとの特語で是則
敬白謹言の言ふる〻〻古言の送るるるぐ〻亦駿遠甲信の國人いかく〻
をのるとまとべ死をちべ食ふべ死をちべとのちのどとのとのい高の義ふる〻京
軍物語のいんとち〻みをとのんどるのをるとと書たるまるすぐさるべどとの
とも笑ふのるとるべ又江戸人のかるとのふべ死を京とり以西るる人いあべとさひ

とのいかるるい間あり濱城天書天神云。雖天一神造功。何能一
夜之間有振辛。これ間字をあるとと訓しる證るりかるとこうう彼
処ものとのいふ義ふ乱ふ吹るるるふ秋の草木のちをるれば古今集文屋康秀歌七新撰万葉集ふ打吹丹秋之草木之
芝折礼者義とあり と咏じたるかるも間ふる〻秋の山風の吹く間ふ草木の凋とのいふり
亦行とのいかもかるるをるるるゆはれどとる異るる歌行い行程と熟〻る人
の道をかくこべかるとふ行ふとのいかとふいるのとるでの間ふ〻ふ俗いるかるち
まとのいふちるれば今るるとのいかるるを昔い行とのいるるるひるるのも是るり彼處
るるべと限止るるるるるるの義い乱るるるるべるれどかるるとのいかるて雅たれされば
みやこべの云茶ありるるくのいふ工夫ふ雅たるふわるべど京師の俗もるるる
るのい近江人の云茶ふ化ぢるる亞たりとかるも多くとのいるく新まり紀含
繁花の地い諸國の俗言ふ化ぢられあのいひさるもかのるかるいかるる〻
るるかるく行ふ流行云茶とのいふりのさくをり〻出来るく古言い大るる失

るものゝ亦遐境村落の他の人をまゝ〳〵ざれば孤さるべし古言も送まり朝よ
失ひて野よ求るといかるゝをかりのべむらん

○宝の山へ入りながらもを空くゆく〳〵ゆくとの常言い唐山の古語なるよこゝもと
ふるくより雅俗の口實とさゝうるやゝ二代實録巻之六貞観四年正三位
行中納言伴宿祢善男が羨状よ悲二宝山之徒一帰痛二刀林
之永割一といふ語えゝうり後くの他ゆい今昔物語よ亦られを載さ
ゞ今昔物語のくゆい下よりのべ
因よいふ今写本ゆく行く二十巻の日本後紀い舊史よあゝざるゝ
既よ識者の辨あり後人古書より輯録ゆるのゆゑい後紀の
殘編ゆいゆゝざるべけれど足らざるとゆい捨りくゝ愚い見をゝも
引用ゆり閲者怪しむとゆゝ

○むこいむくはゆりくゆい世ゆゑ女ゆりまゞゆ向ゆゑひとい隔ゆゝ

物の二ゆるゞゆりたるをひとりよひゆゝゞひあさゝてゆひの如ーゆーそとい八重末ゆく
今俗い弼りくゆゝゝとゆり拍の數累くるを八重といふ八重垣八重山の八重の如ー

○今の俗さゝゆる説芽のゝちく脱ざるをゆゝゝさるといふこのいらハ苛の字ゆり
和名抄云玄篇云苛音何。和名伊良小草生刺といりこれるべー

○推四の物ゆいゆらゆゝ時くゆい長ゆをゞ約ゝくゝゝ短ゆをゞ重ねくいゝ赤
物を比喩しくく頼るもゆるゞゞ幼少ゆゝとゆゝ就言ゆゝも不憂ゆれどゆの就
言が常とゆりて老けゆゝも改ざるゆい傷痛〳〵飯をゆんゆゝとゆゝ青くと
ゆゝゆゆ尿をゆくとゆゝゆゝゝとゆゝゆゝゝゝ

その鳴音をいみのこ餅をあんりといひ餡餅をかき酒をかくこと六
酌を辞とる言葉をとゝまうり赤小豆をあつといふいそよ色の赤けれどゝ
あせ物をあつどゝいひ数くるぶべ居まいるらん又の菜ともいへこれい菜
蔬の類するべ物よ魚類もまべ〳〵菜といひたゝ羹をあつけといふ
飯よ汁べ〳〵食へべゝの餘茶をちゃ〳〵喜の物をかう〳〵あるくをあんよ舞を
おんね乳をちゝまどいふゝかいニツ三つ五ツ六つぐの俵ゝよ限るべゝ
今の婦女ゝいられを雅言ゝりとゝいとりてや三十四十よゝるゝぐもゝれ飯を
ゝんちゝのい羹をかけゝといひ餅をあんもとゝひ赤小豆をまゝといいろゝを
十ゝの餘米をうちゝ紀味噌をゝ〳〵菘をこゝ茶豆腐を魚鱗をゝ〳〵ゝゝ
湯をゝゝ物とゝふゝ〳〵ゝい草ゝをびゝとゝの草紙よ古人の編ゝゝゝれゝゝれ
べゝゝゝい戒せべ〳〵ホ按ゝるよ乳をちゝとゝの乳汁とゝべゝゝちゝゝの羹ゝん
べゝゝ〳〵ゝゝゝゝ憂ゝゝり

清ゝりゝよ誘い今よ遣ゝゝもゝゝゝり誘草ゝゝゝのい和漢の書ゝもゝ
その如処をゝけゝるのゝゝれば穿鑿附會ゝゝもゝゝゝゝ誘の遣
ゝゝを二ツ三ツゝよ記を
今落情ゝる女ゝを罵ゝゝ〳〵ゝゝれ女ゝゝゝの言葉宇治拾遺物語巻七ゝ
ゝゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
云云とゝゝ又者齋ゝゝゝゝゝを撰〳〵結ゝゝたゝゝ起ゝゝゝゝの誘ゝ今黄
物語巻の十二よ彼ゝよ宝のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

入ル寶山而空手却回。良以自笑也。

ものを知れば唐山に出処あり。古くより今に縁るなり。今昔物語に書れたるは亦狼狽とする味噌をつけるとかこれは古本紀巻の二十五にえたる桃井直常敗軍の時の人の落首なりとて「唐橘や塩の小路の焼くるを桃井殿は鬼味噌をとれとの仰の記載たりとの下の句の味噌をとれとのは今俗の味噌をけるとのへとは直常は勇敢を恐の大若き世人鬼桃井と稱せしぞ。あるべの狼狽したれば鬼味噌をとれとそ。あるべん村酒を鬼ろくとふどく鬼味噌ろくは蕃椒味、噌のまた上の句にはとの橘とは橘とは塩とつづけ小路を麹とつけ焼し鬼味噌と注ぎたるは鬼味噌は蕃椒味噌のみと味噌と又食物の赤くてその味の鹹なを鬼とは鰕を醤油の漬焼などを鬼から焼などの類あるべきなり。

縁も昔より唱来れるとかぞく堀川百首題抄歌集に川ちかの川ぞたちかとたちかの桁よりとも又桁よりとの歌をたちの桁の字は桁の縁なるべし欲和名抄に桁和名比知岐。功程式云。肱大云云ちかの肱とうまくるまやと又物の忽然と失たるを天窗のつまつ嵐の不ねるあらんとのたれも昔より唱来るとる歌北村季吟の山の井寛安五年印行也全部五冊あり寛文年間版注よく味山井とふ弟集を今世の行也とぞ

あらぬのまつたるのはうるしたり

周易の今俗小児の物ひいきらるる鼠彼が唱音のとやめんべと抱朴子に鼠壽三百歳。善憑人而トス。名曰仲。

能知一年中吉凶及千里外事とのたまへれば我が俗の嵐を仕くと呼べるものを抱朴子の説を稱つり亦和名抄に四聲字苑を引く鼠居與反和名須三宮房小獸。種類多き者也とのたまへ図経嵐耗久嵐鹿もとて嵐を舎の盗賊とん和名抄どきとん移らひ明とこの歌欲

又不寝窟の累欠鼠の全身の潤皇く世俗の頭髪のを黒くらりて小
賊を天窗の穴に氣ろ穴ふるぶ
○白波緑林の故事よりて盗賊をちくること聞くみどをの名とふい
ちろるぶくとれを実名よ白浪と書とれてその義よ稱つど実名ふ白波と
書ぶくと盗賊を今俗へどろばうとふちろくとろと通ぶ暴ふ悪戻
暴悪の暴ふるべくちろる世俗ふ其角が五え集よ泥坊や花の落ふく
ゆるれくうとふるをえく泥坊と書りのれど泥坊ふ原来假名ふるを
ちくぶ暴も坊もその假名ちくくるくとふいたぶり亦世俗小賊を貧寇と
ふ唐山よ夜驚とふ怪鳥ありとふりのよ財をぶく五雑俎云荔支果猩
熟。專有就盗。緑枝接樹。矯捷如風。園丁防之若巨寇
然。瞬息不覚千万樹皆被漁獵。名曰夜驚云云又棍徒を
スリとふ郷談雑字よ郷談剪扱音正掏摸と出ちくふ契沖打社よ兼盗集

ふるべ猿人ふちりもえとごもひるくれをくくふくねふのとたちとふ歌をふく
籠字ふを當ちを亦学論篇よふ須利と書ちく梵語ふりと注ちたれど出処詳
ちくど彼ぶをちちぶひたくをくさふるくふ扨とちくんとちるるれバふぶくとちることと
ふちりふ又念秋杜騙を胡麻の蠅と名つけたちふその賊ふちくく不ちくんくれふと
れを胡麻の上ふる蠅よ盗云たちくく亦男女を豪奪ちくくられを累代賣ちるふの
を世俗ふどちくくと唱て勾引の二字を當ちを乃唐山よふ拐契の賊と和
訓ふどふくくふくその門を迷くく他処へ誘引の義ふちくんくの人を欺くを
だちくくとふ狐狸の人を魅ちるを又ぶくとふぶちをふ馬鹿ふちくく馬鹿
秦の趙高ふ鹿を指ちく馬とふふくく故事ふるちふ世俗もちくくちとる
ちくべくとちら妄盗ふ辨ちれど筆ふちくちくよ注しふ
○九月ちくく十二月ちくく夜長ちを比諸職人夜をとちくく作ふ経営ちるを夜ちくべ
ふふ婦女ふの燈りよ縫刺ちるもを夜ちくべふ一説よちくくべい夜渦ふ京

○俗夜も活業を勉むるゝ人主人たるの茶粥を煮ることなれば故に夜
鍋とゝの寒く夜の菜餅を小鍋ごとゝゝが如くとゝを或いゝの説非く
ゝゝのべゝゝ昏のみを夜へ延ゝゝゝゝゝゝの義ゝゝ夜のべゝゝのべゝ□のゝゝゝ遍
又夜並の義とゝゝもゝゝゝゝゝ乳持乳集ゝゝ育ゝゝゝ天の河原いゝゝゝゝども
ゝゝゝゝゝゝ

めれど踈よその義と違へるものゆゑだも湛ぜとそ古人もこれを論じたりし
うたゐとい新年の賜といの義ゑくそれを受る人をそうゑと稱とび給る
贈る人より標ゑ年ゑと寫とゆ不敬の至とゑ受るゑめもゑその不敬をちぢん
年ゑと書とそ紀玉い賜の假字ゑるゑゑ甘がうく音ゑ繕ゑくねんどうゑ湯ゑとそうろ
ちぢくうゑい畢竟ちくうんの茶いちくうん病が買ゑめといい渡ゑ似たりとある物り
いうとゑ又おうゑいい砥といん枕詞ゑくおうゑいのうゑいゑ年ゑを
うくとうゑいうとうとや近属俳諧牡丹の歳旦ゑいの春と詠るおうとい年ゑを
ねんぎうくと読と同日の説ゑり物本を作るゑのゑいられゑゑおうぢとその乖るところ
一言半句たりとゑもうくゑ婦幼ゑゆゑんとうくゑ紀ゑりと志ゑ俗ゑゑ近代ゑ旨
とゑとうれば洗ちうるゑのゑ考りさればとうく今の作ゑ物語ゑ雅文ゑうく
紫ゑというぐ紫女といへどゑもとべるゑうじん放のゑゑとうればそのゑとを述その題ゑ盡
ちゑ衣冠ゑう懸鶉ゑう動静云為ゑう喜怒哀樂ゑう瞭然ゑうく竹堵の

中ゑおり看官或い飽べ或い怒ゑ或い怪ゑ或い悲ゑ潸ゑうく涙の冊ゑを濕
とゑを覺ぢとうるゑ隨ゑく僥ゑうるいそのゑ文和漢を混じ雅俗をゑへん情を
ちゑし艶勢をゑし百幻百出奇中ゑ奇ゑを出さべゑゑべゑいゑゑ唐山の稗
官者流演義小説の書を編ゑ俗語をうゑとゑぢうゑう彼水滸傳ゑとい
ゑのも雅文をゑうとうれを綴らべ艶羅も學ゑて功ゑうん且唐山の作文い雅俗の
二つのゑ我　東方いうれゑ倍ゑうく雅俗ゑ新故和漢の四ゑううれを攝ゑを
易ゑうぐさもゑうぐゑれ稗説瑣言い鄙事ゑうゑむべうれゑのゑうねど名利の
間ゑ拘ぶゑのい解ゑうくゑのれを枉るもゑゑべゑ他を繼ゑいゑと易ゑくゑづゑう
ゑのゑい離難ゑ成らどい識ゑと古人もゑひうりゑぢうくゑの語を嘆ゑぢ
因ゑいゑ江戸の書肆ゑ本を新刻ゑうゑれ作者の稿本を種ゑこ唱へ
ちゑゆぢと壁ゑい足利時代のゑを繼らんとゑゑれゑを平紀後ゑを平紀ゑど
ちぢくゑその據ゑどうとゑべれ書藉を種本ゑいゑべれゑりゑ甘い繪

草紙の作者とゝのゝく近藤清春羽川珠重富川吟雪が後画工の
作者と筆畊を攪たりしとゝ書肆より借用とする引書を種本と喝し
ゝべ今日ゝのゝゝべ〜浪華の書肆いわ寫本と猶ゝたゝ本とゝゝ
優ゝゝ

○鹿嶋おどりとゝゝのゝ〜をゝりさく〜と拍をゝさゝ猛者なるだ〜むり人のゝろ
猛ゝを肩とゝたる時ゝ拍をゝゝゝ鄙曲おゝん歌舞伎役者の朝夷義秀ゝ拾
ゝゝ私田が三男小林の朝夷たゞゝゝゝゝゝゝゝ猛者ゝゝ朝夷ゝゝゝ猛さ
ゝのゝゝと自誇ゝゝゝゝれゝゝ禄年間の歌舞伎役者中村傳九郎がちゞめと
弱夷ゝゝゝゝゝゝゝ

金平千人力星

全一冊尺一十六張繡像四張あつまり
もろもろ第十二張より十三張より

元禄四年辛未五月吉日

通り油町 井筒屋新板

○亦子が藏る所の一本あり元禄十四年に刊布せるものにて其の趣
相似たり當初金平と題する繪草紙數板あり今罕なり
古夫が戯曲に繡像にて古夫直傳の正本と称するあり
ひさぐさとびくりのをうつす寫しとぐるに車芳の至て好事なるこそ
とそ此ある人なれ笑るべけれど人の情欲も異なる世の時の景迹を世の童
に示さんとて慢に筆のまさびとんかるに類を集んに子の所藏
をうつさびくあれど元来その奇に誇るよりねば固るものに一枚も載
さびの層を臺必自土也曉昧を喻せるに車にうりせられはそれに前墓に温写
せる去年館のうれさんで実室の番付もまた此ひとりて出せり斯ものいるべくうれ
世の筆の蹟又稚れ対に弄び　物を年を弾ぬるびんかいとるつにくるばるかり

きはひさらら

全一冊折本ありて奥村源八政信画
繡梓の書肆　蔦屋の年月詳なるべ

坂田金平入石

頼光朝臣に属したる平公時代に一つに酒田金平といふものあり勇敢膂力
世に優れたるうを世に知られ泉方夫が脚本を鼻祖とんされば
名人にて膾炙しく古今未生の金平が勇力親衡義秀ホど上に出ツ今
羽牛蒡ものくさへ彼が名を負しうつと怪しべへゆるくばやたる墓
さるものの宝永年間の繪本もてさはひ桜と題と図すの猛者と
ものくて十餘人の門純方よりてまりて金平入道を巻尾とまりて金平が髪
の図い画工の滑稽欲られらをうんでも當時の流行をちらん

東武大和畫工　奥村政信圖

㊂ 團頭

織夫いろとりのまことを畧しるを達いてくらのく和名動よ屠児和名惠止利
云云 屠牛馬肉取賣人者也。ようつり縄倉ね軍のこと縄多の長を長
史とひとりを祖来為い張里るぐ〜と南留敞志よりつり唐山のこと屠児
屠戸るど稱さるものいこよりの縄多の義をいめるど獸を屠るを生活
とをとのこ　本邦の獸店の郷〜宋の時團頭とのものこの方の縄多非人
長よ似ようり名物六帖よ委巷叢說を引る〜宋時。杭丐者之長曰
團頭。雖富而丐者之名不除。ようえ亦水滸傳卷之二
十五。潘婦藥鴆武大郎とのの回よ金蓮西門慶王婆
相討〜武大を葬んとをとこと王婆道。只有一件事要緊。地
方上團頭何九叔。他是箇精細的人。云云とのるいはこのこと
書山の俗語よ物の圍ひをを亦團頭とのるこ水滸傳第八回ま一酒七
有半。團頭鐵葉護身物とのるいはこのこと鐵の鍱鈸を打る首物
ゆり東涯先生團頭をヨジロと訓ズ与二郎い京師の丐頭人
倫訓蒙圖彙ようえ圖ひをの人
ゆるこ團ひの雲を氣ようの頗奇ようを十人を火とを五火を團とを一團ハ五
十人の日知孫まえも又團い聚ゑ丐者一團のひるんぐるこ和名ひとのひとりゆるの義

㊃ 藪入

毎年正月十六日市井の老小或ハ神仏へ糸詣〜或ハ郊外よ抜山〜奴婢い
この日主人よ許されてゆめぐ親里へ帰展さるを藪入とのる今俗ハられを宿
ゆりとのるり呂正月十六日のこのふぐ齋秋二時よるのをあり五雜俎よ齋魯
人。昔以正月十六日遊寺觀。謂之走百病とのるよ相似たり
按ずるよ走百病とハ抜山〜元気を難ひ百病を走らんるの義ゆるぐ
本邦よ藪入と唱るハ本据辭ゆるぐ呂え禄以降俳諧の發句よえたり

類栁子里居辨ず其角が云ふぶつりを春の月とそ上古の人のかぞろ
ニ〜ゝび盆後の悦びを待ひたりし或古宗匠の判詞ゝ中ぶの植物ゝ二百去
養父入人倫ゝ人の字ハ字去と解ぢをられらハ文字の上を信用してその注
ゝ〜たゝへハ家〜の奴婢僮僕下男等ゝ一度の暇をもゆるさ風
氣風ゝ例〜〜〜

原野經之逍遥とるを數入りこのひたらんと奴輝ホが親里へ向ふも朱門
ふり白屋へ入るるれがられをも數のうとりふるべしあれば唐山の探春
蹈青の氣をも稱へり縣ふり草ぬり死田舍へ向くを數入といんうり疑ふ
ぶるべ又越後名寄卷五。舊蹟門。奥沼郡より逃入村とりあり。一名
を數入村とりふうーんえたり。土俗の說より小千谷の北ふり山中村ふり一里
許を隔て左大臣藤原時平公の墓あり大臣の餘流と稱するゆゑ彼
村よりうりて逃入村と唱へ一名數入村とりふうを記ちり土俗の說に信
ぜるよりどこれいえ弘建武ふり兵乱ふちづたて朝權を失ひたる貴人
のこらとりまぜさとふひたるそのゆゑ孫遂より花洛よりどこ大臣の餘流と
稱ちるるたてそんとゆれめちれ貴人京師ふり逃ぶて村落よりの義
をふりて後世逃入村と唱へ又數入村と唱るゆゑの古跡ふりて分明し
ちれがらの村も數入の一證とぶべ天明年間熊谷師吾山が數入中

宿てぶりの麥ちりたと咏ぜ山ふり數入の義を辨たり予總角のころ熊
谷の連歌を嗜ちしが壯年より及びて志ちよりおらぶれば廢せんと
ちりよ家ちいふくふれを好そのゆゑ行ふその意より情らんとをおそれて
黙止ちり九くて寛政十年の秋家ちに牙中ちとゆひ〜ぶ意より俳諧藏附記
を輯録ふてその遺志を果ち後ハ更より俳諧連歌のうとて說ぶ
今この筆記をるんちふちぶ其角が發句を綜〜又詩歌の吉凶を說ふ
ふその辨こうぶより及べが頻より家ちに墓〜世よおやーてゆくもうふぶ
何ちろ批評ちあちんとちのより胸ちぶふてて涙忽地よちふり落草
さうち湿ちふるよせんちべあくて机ちんゆり枕ちーふの夜ハ物もかぶちうる丸

㊃ 猴蟹合戰

昔ふり童蒙のちるる物語もあるぶ根くゆありちひ出るちこてより注ふ
窓友の暗譚より換のあちらくハ穿鑿附會の說妄かるぶ

○猴と蟹と山蟇を繞る事

猴いかれをうゝく利を急ぎもとめほり〳〵柿の核を易うとする蟹いかれをのるまゝに己が飯と易く彼柿の核を頭よりれば立ちまち芽を出しその樹俄頃に向上るばかりなりて柿果鬱茂りされど蟹は樹に縁なき便なけれ彼猴しく果をとらんとすれば猴は枝ゝ柿をうち食ひて渋紙を投ぜ其ひるるものが獨り著る初め蟹は樹のもとにいて甲を負傷らん辛〳〵穴へ逃入りその疼痛堪ぐゝて遂に起ど蟹か親族妻子縁由をなゝ且怒りて軍兵を起しく猴を責ぶ猴も又鬱の著屬をおゝくられと挑めそその威勢當べうもあらざれが蟹はもとく情に堪ずあゝ穴に執蟹ゝく軍略を相議る折から臼杵蜂鶏卵笱猪未て共に奇計を運らしまん蟹に私睦をしく猴王を穴居へ殆引出を盧遮にとりたる猴はその謀略おそれをもふぶ火箸を取く堤火を掻起さんとすれば鶏卵は盧中に伏しく發ゝその脆を焼よりれがあどろく遽て厨なる糠籾桶とゝのふものをそのれ火傷のほそりを醒さんとすれば蜂は桶のほとりにそり亦逃げをゝく刺は拂もあべきなく叫びく背門より走んとすれば滑海藻足にまとゝそれをとゞび杵は棚よりおちふり臼は金門の上より轟落ゝく物ゝゝび背をうち碎ゝゝうり果て切も起どもの元蟹ども群たち来ゝく敷虫をあげ猴を夾その穴を咬て教びあつとゝふる

按ずるに唐山の小說にも蟹と猴と戰ひしに所見の蟹と虎と鬪ふ事あり李石續博物志云蝟蜂の大者能与虎鬪取之不戒蟹能殺人亦蟹鉞云蝟蜂は蝟蜂花貴甲蟹之最巨者殼純青色有両鬚横出蟹員無毛両螯八足後二足遍而傍大者長尺餘両螯至強八月能與虎鬪虎不如隨大鬪退殼一退長山谷楚辭云螳臂當車蟹螯強兮鬪虎又蟹と山神と鬪ひ〳〵あり實異記載近世有彼

臨寶永中江戸書肆所刊行繪草紙猴蟹合戦圖

第四張
上海五張

この類るゐおゝくべしもろ〳〵ども舊板いぶ〳〵凡え禄〳〵貞享寶永の間ゑ刊行せるところの繪草紙い書画を二度よりうち或い九龍の稲妻形或い毘沙門亀甲の筆情紙を標紙とし貞享中印行の猫ホぼゝしもこの類ゑそ最小冊なり

再板

さるかに合戦

下

全本一冊所纂下巻也第八頁

餘宝暦明和の間再刻せるところの繪草紙桃太郎衣かたきり雀兎大手柄花咲爺浦嶋太郎ホの歌本より原是江戸大傳町書肆鮮形屋の藏版をしを倫学町なる書肆西村永壽堂うけ藏めて今あわ年くみ見行せらるる奇とするよ足さ抜ぱりしつ

新一常云。乘一船一泛一海一往一天竺國一者已六七度。甚最後船漂入大海。不知幾千里。至一海島。島中見胡人。衣草葉。懼而問之。胡云。昔與同行。俱數十人。漂没。唯己隨流得至於此。因爾採木實草根食之。得以不死。向報哀焉。遂船載之。胡乃說。島上大山。悉是車渠瑪瑙玻璃等諸貨。不可勝數。舟人莫不棄己賤貨取之。既滿舟。胡令速發。山神若至。必懷惜。于是隨風挂帆。行可四十里。遥見峯上有赤物。如蛇。久之漸大。胡曰。此山神惜寶。來逐我。爲之奈何。舟人莫不戰懼。俄見雨山從海中出。高數百丈。胡喜曰。此兩山大蟹螯也。其蟹常好與山神鬬。山神多不勝。甚懼。今其螯出。無疑兵。大蛇亦至。蟹與盤鬬良久。蟹夾蛇頭。死於水上。

蛇連山。船人因是得濟。又蟹と蚯蚓と戰ふのあり頭陀物語より。

安斎涼兒流説のうちに行脚ちん一日於山ゝ日暮て宿よりいらんとすれども後方より物あり怪しとおもひてうしろを見ればたゞ三尺ばかり長さ丈あまりとゝ思ふ赤色の如くなるが風をかゝとうさうあるよりて動くとも飛とも知ず宙よりくるまれて近つけまする程より涼兒魂消て肌膚栗のごとく襟寒うなりて叫んとすれども声發ずして一歩つゝ前へとすゝまんとすれども怨地後方より音して水さゝとなる草木革颯と戰ぐよ物の響ひしゝとすのもふるとうたるその物をうたゞ地ばかりをうつを汗を絞て辛じて人の家へ走入れば主人涼兒が面色常ならぬを訝て其故を問へ涼兒ちゝの変化よりまうらうを告る主人これを笑て

そうちのほう笑ゝそゝ世よりみだけ物よあぐどうの山の蚯蚓く蚯蚓山の土を食ひて年を積ば土気を起ゝ元よ飛行を必るよの如く雨霄一夕つゝ

はいくつともなく出あるべし澤蟹と戦ひて敵を打ぶて脳を吸ふこと
西國に多しなりこの蚯蚓は知るべしこれば澤蟹の
大サ三四尺その最巨なるに至りて草木を生じ眼の光天を射螯を抗足を運して人を食ふ
あり蚯蚓は彼を打ぶて却人を済ふに似たりとなん
是蚯蚓のその虚実はいまだ知らざれど蟹は巨大なるものなりと云
玄一中記天下之大物有北海之蟹焉一螯能加於
山上身在水中又山海經云姑射國大蟹在海中蓋
千里之蟹也又女丑有大蟹廣千里と注せられ大蟹の他
物と鬬の證ありしかの虎は本邦なる獣なれども猴に代たる歟猴
とともに因縁あり蟹錄云眉公書蕉云西方山中有人焉
長尺餘。親身捕蝦蟹性不畏人見人止宿喜依火

以炙鰕蟹伺人不在而盜人籃以食蟹名曰山猿其
音自叫人常以竹筯火中爆而山猿皆驚犯之金
寒熱ともに山猿は山都の属欤山都は猿に似て最大なり性蟹を
貪て食ふものなりもしこれば猴蟹と怨を結び且鷄卵爐中に在ときは
火を塞て爆燁猴を驚ぜしめ漁者の竹をもて火中に著爆燁
て山猿を驚ぜしめ亦蟹録に述異記を引て宋のえん
嘉の初富陽の人王子窮瀆中に蟹簖を作るに山都その簖を翠て蟹を
盜るものを載その説前の山猿に似て頗精細なれを述異記に參考せる
に和刻の本にはこれを亦疑て山都或山精に作る孫之騄云異苑云
山精如人一足長三四尺食山蟹夜出晝藏とこれ
山猿山都は老猿猴の属なり蟹の猴を螯とるとこれを根くるを
〇猴蟹合戦と題せるは蟹録云呉俗有蝦蛄蟹亂之語蓋

取レ其ノ被レ堅執レ鋭歳或暴至則郷人用以為兵證也と

○蟹ゲ拾ひ得たる飯を惜むこと猴よりたる張敞

集朱登為東海相遺敞蟹醬一報書曰。蘧伯玉受孔氏之賜。必以及郷人敞謹分貶於二老尊行者。敢獨享レ之。見晴川集

とかくる趣は似たり○蟹ゲ猴を傷らるゝ及ぶ〻喪蟻皆

らんを憐む類を盡す猴を責たる義〻蟹録云。菽園雜記云。

私江沈宗正。毎深設斷於塘取蟹入饌。一日見二三

蟹相附而起近視之。一蟹八跪皆脱不能行。二蟹卵

以過斷宗正為感嘆。遂折斷終身不復食蟹。董孔昭

曰。西利生之論友也。曰。第二戒夫耳目。不能及手足

不能相代在我者且然。況伊人乎。義哉。斯蟹郭索乎。

縛蕭之間。謀其身。不遺其友。とのひたる且蟹の為に答

義。蟹を報ひしるかの和漢よりえ享釋書云。蟹満寺者。在

山。別久世郡有郡民。合家慈善奉佛。有女七歳誦法

華。普門品。數月而終。全部一月出遊。村人捕蟹持去。

女問。捕此何為。答曰。充食。女曰。以蟹惠我。我家有臭。

相報酬。村人與之。女得放何中。歸家貶乾臭。甚又耕

因。中一蛇追蝦蟆而含之。父懈而不意曰。汝捨蝦蟆。

以汝為塔。蛇聞言擧頭。見翁吐蝦蟆而去。父歸舍思

念。語發言。恐失愛子。慎怪不食。婦及女問曰。翁何有

憂色而不食。父告實。女曰。莫慮也。早食焉。父悅受膳。

紛夜有叩門。女曰。是蛇也。呉言三日後来。父開門

有衣冠人。曰。依約来。父隨女語曰。且待三日。冠人去。

女語父擇良材。固造小室。室成。女入内。閉居三日後

冠一人果未見女ノ屏居生念恨ノ心乃復本ノ形長數丈以身纏室舉尾敲戸父母大恐不得爭奈年夜叩声息聞悲鳴ノ声頃刻悲声又止明且又見大螃蟹百十手足乱離蛇又被蹇百餘所并皆死女開室出顔色不變曰我聞戸外大小ノ蟹千百死此ノ蛇大蟹ハ多ク歸小蟹ノ死今存者皆小蟹耳然大於孝常我通夜誦善門品有一菩薩長尺餘語我曰無怖也我擁護汝父母大悅便穿土埋喪蟹及蛇就其地置寺蔦冥福故号蟹満寺又曰紙幡寺見于卷二十八唐山ノ狄訓練ノ悋西湖判官蟹の自稱を嘗て狄が五子相継て病死ちり湖州の医生の妻ノ蟹を食ふとを嗜て死て蟹ムよの苦悩を受て平江の細民張生蟹を煮て出て活業て殺ちの蟹数千百紹興五年七月ノ至ル

その家忽怪あり張が女發る死て張夫婦も又死てその家斷絶ちる濠の王吉が夢ノ巨蟹を乞て司馬相如が文章を乞て天ちる横行ちん乞られるる宋の鄭浩が蔡京ノ隔ちる昭別ノ籍ちて乱石のあ蟹一枚を乞て江ノ放その應報ノ次の日赦されて京ノ歸乞て宋の元嘉年間章安縣の人嘗虎を屠て海に至大きの蟹を烹て食ひて夜夢ノ媼来て汝我肉を殺ノ我汝が乞食りんと告るとて其人明日虎ノ傷られて死ちる亦順治八年の季冬百獅池の蟹枉死のりの屍を示て滄婦姦夫を顕ちる呉縣の進士蟹を釣て解えの兆とちるる唐の龍朔初洛別景福寺の比丘尼の侍童伍五娘死ちりその生ちる寺中ノ蟹を食ふ乞て力林地獄ノ墮ちりとて乞その牙ノ憑て冥福を求て乞四的湖中の民徐生が婦蟹を嚙ノ乞て乞その夫毎秋ノ海濱ノ至て乞て螃蟹を拾ひ縄を乞て

られを貫く紙撫で洒るるられい婦蟹を煮て飽まぐられを嚙みその縄戸外
に積て累くたり一日婦早く起て窗を推積たる縄の処をそれば故而
の鬼つどへり大に驚き叫て遂に病を受時く螃蟹ゐぶ身を繞てられ
を夾と叫びたく狂ひ死をたる余人その処を螃蟹除と唱へたるこ
れ小説に述るところ載て類書ひまあり只蟹の為に苦怨を報ひ
故事我邦関西の俗説に毒永の役に平族長門の赤間関屋嶋
檀浦に沒とその寃魂化て怪れ蟹になれり今に至て背殼人面に似
たり眼口分明にて勇士の怒をるが如し名けて平家蟹とゐ摂州大物
浦にもこの蟹あり海人これを武文蟹とゐ又摂州安里河にもあり土人
名けて嶋村蟹とゐ相伝ふ正慶二年一宮尊良親王の随身秦武文松浦枝
に謀られ御息所を奪去られ武文これを逐て大物浦に自殺て寃魂風
濤を發して主を救ひ遂に化て蟹となる或いゐ享禄四年細川高國

三好海雲と戦ふて敗走とその臣嶋村貴則苦戦て主を救ひ遂に死
里所に沒て化て蟹となるとゐてその實は一種の唐山よりこれを関公蟹と
ゐの蟹録所謂呉沈氏子食蟹得背殼若鬼狀者 肩目口
鼻布明白常寶戲之ゐ亦是蟹に係ると云ふ亦是蟹に雙あるの説由来久て五雜俎載唐天寶間
當塗民劉成李暉以巨舫載魚有大魚呼阿孫陀佛
俄萬魚俱呼其声動天晴川亦云堅瓠續集云唐天
宝間宣城劉城舟中聞蟹呼佛云云ある怪談蟹ゐいと多
○蜂をゐて猴を刺ちい封侯の對るゐ又陵鹿山の強盗八十餘人京に来
る水銀商人をひそびとんとそ鞦の蜂に刺ゐて又法成寺の池のほとり
る蜂阿弥堂の簷にある蜘蛛を刺て其の友のおよ仇を報ひて共に今昔
物語巻の三十の十四張より十七張にえたりとゐふのみをとひて有る欲○杵

と白が蟹を輔けるとあるは公孫杵臼が名を家とする欤史記趙世家に
趙朔が門客公孫杵臼その友程嬰とともに謀りて趙氏の孤武を輔終
に仇人屠岸賈を滅ぼすことあり○古人戯れに蟹を取りて傳畧を述べ
るは宋の陳造が長吏傳清の孫之騄が日蟹傳ホありかれば我俗
の旅柄とそなる猴蟹合戦も年を同じくして語るべし
同じく蟹杯曰。其斗大者。匡一名斗。漢人或用以酌酒謂之
蟹一柽。亦訶陵雲螺之流也。見于晴川蟹録。後蟹録
亦云。顧一左一右。蟹杯以金銀為之。飲不得其
法。則雙螯鉗其脣必盡乃脱。其製甚巧。載石屏詩。
落木三秋晩。黄花九日催。何當陪勝践。把蟹螯
杯。予曩日嘗聞一老雨談。寛永中京師の蛮妓吉弾が蟹の杯を
圖して再拔ぎるに彼杯の原来顧大初が蟹杯を摸したるなり

且その傳畧も悉あり。元吉弾は寛永二十年八月廿五日没す法号唱
玄院妙達日性鷹峯壇上の墓あり壇上の山門は吉弾が建立なる
が後人に係りて改建なりと寺僧の話るなり京都なる賀樂主
人はその墓碑は寛永年慮檇菴墨蹟をあらはれたる孟の辨
なれど聊曩篇の訛舛を補ふのみ
○伊豆の七嶋大嶋なり八丈に牛馬の外に餘獸なし但鼠は酷
多くとなり按ずるに嶋鼠は蟹の化なるべし晉書太
康四年會稽蠛蠛及蟹皆化鼠甚衆復大食稲為
災とあるはこれを解鼠とあるに似たり又述異記その餘の小説もこれをとり
○東坡蟹を嚙て後漸その殺生を厭ふ復終に食はず又明の李
笠翁これを嚙て東坡に過ぐる後蟹録云李笠翁平生嚙
蟹。以蟹為命。毎年蟹末出時。即儲錢以待。自呼甚

銭。曰買命銭

の蟹を食ふと柿と荊茨と同く食ふべからざる本草にえたり亦蟹の毒は中られたるは大黄のミすくん紫蘇冬瓜汁凡蒜汁豉汁蘆根汁黒豆汁生藕汁皆その毒を解とぞ

晴川られを餘杭の呉世衡は味あらく後蟹録にしるせり

㊄ 桃太郎

童話は昔老夫婦ありけり夫は薪を山に折婦は流に浣ふ衣を浣ふに桃実一つ流れて来りて婦の足にまつわりつく夫に示すとその桃あのづから破てゆ男児あり名を桃太郎と名づけ老夫婦原来るるこの桃の中なる児を育て喜てこれを養育ミその名を桃太郎とぞ称る或云老婆桃実二つを得て家に携へ夜ふ寝とあり又男子を生り因て桃を命名とあり又その児忽ち成人つて一七夫婦これを食ふ恐ちまた成人つて一日その母に黍団子を乞ふ母その故を問

い鬼嗚呼勃起て寶を海に入れんと答ふ父ゆく〻と勇ましく出でその子既にその〻ぶ桃を拾ひ家に持帰りを擣用に著父母に辞して別れ途に失ありその後間なく黍団子を乞ひ一つ与へ猿と雉子とあつ〻ミる黍団子を与へ後者と遂に鬼嗚呼の巣をその崖を責て鬼王を擒ふ鬼どもその敵〻がられを乞て二つの宝物隠蓑隠笠打出小槌を献ず主の命を乞ひ斯て桃太郎その寶を受て鬼王を放て犬猿雉子を引て故郷に帰ふ富さかえ父母を安楽に暮ひ〻とのこと

桃ぞ桃實の中より出の生れ児の生れ由い不見て竹節の中より児の生れたるとい和漢にその故事あり述異記云。哭沖河社引後漢書夜郎縣西南夷傳曰云云。

遠夷國名也。其先有女子。流入足。

南甚中有號声。刻竹視之得一男。帰而娶及長

有武畧。自立為夜郎侯。以竹為姓。漢武帝元鼎六年征西南夷。改為牂牁郡。夜郎侯迎降。天子賜以王印綬。後平夷獠。咸以竹王非血氣所生。要為立廟。今夜郎縣有竹王神是也。○又竹取物語にいはくむかし竹とりの翁といふものありけり。竹をとりてよろづのことにつかひけり。その竹の中ときどきひかりあり。あやしがりてよりてみるに。筒の中ほのかにひかりたり。それをみれば三寸ばかりなる人いとうつくしうてゐたり。翁いふやう。我朝ごとごとにみるに竹の中におはするなり。子となりたまへとのたまふとみてとりもちてかへりぬ。妻の女にあづけてやしなはせけり。うつくしさいとをさなければかごにいれてやしなふ。竹とりの翁竹をとること此ならひにて後に竹とること久しくなりぬ。竹のもとにあまたの黄金をいとなむ。竹の節をへだてておほくよろづの物をつくりまうけたり。竹の中にみちてなりぬ。翁やうやくかねもちになりぬ。この子やしなふほどにすくすくとおほきになりまさる。三月ばかりなるほどにまことの人のかたちになりぬれば髪あげなどしてかごにいれてやしなふ。あまたの黄金をもちてこの子のうちにもちてやしなふ。やがてかぐやひめと名付く。三日のよいとなむしたりけるに竹のもとにあまたの人あつまりきたりぬ。この子のかたちをうつくしがりてつかはしやしなふ。この餘竹の節の中より人を生じたりけるに寶樓閣経をひきて河社にもいとはなやかにてゐたりけり。翁竹取物語の註釋にいはく。唐宴記に巴園人種瓜大樹隱如二斗盎剖之有二叟。相對棋戲。一叟曰。樹中之樂。不減商山。但不得深根固蒂耳。一叟曰。僕飢矣。得龍髓菜食之。食訖以水灑之。化而去。

二ツの白龍。

園よりふ今紀州の蜜柑その大きなるものの龍鬚とりの草をもてこれを

累めり 樹仙 鑑 鬚菜を食ちとの故事よる歟

さんが桃果のゆゑ〳〵呪の生ずと作ることれらの説よ因ると且その所

と樹とをいるど別よ桃實とをるるの桃ハ仙ゆゑと百鬼精物を殺もの

功あれども加之流るる桃實を以て窮鬼を遁ひ四人を生福を未ち

うの古事記所謂伊耶那岐命告桃子汝如助吾於葦原

中國所有宇都志伎青人草之落苦瀕而患惚時可

助と告ちゆゑ亦晉陶淵明が桃花源記を点ひ以て歟又逸異

記ハ日本國有金桃其實重一斤とつるも稱へ亦桃の鬼を

退治もるうの本草綱目巻二十九五果門桃果下云搞屢尸疰鬼

疰忌以桃仁五十枚研泥水煎取四升服之又傳尸

鬼気桃仁一一両去皮尖杵碎水一升半煮汁入米作

粥空心食之又鬼疰心痛桃仁一合搗研漿湯服之

亦云神桃主治殺百鬼精物殺精魅五毒不祥療

中惡腹痛又桃花下云氣味苦平無毒主治殺疰惡

鬼令人好顏色悅澤人面皺確類書云神農經云巢桃在樹不落殺百鬼

果を食ゆゑ忽老を退復弱ゆゑとそいつり又桃葉下云氣味苦平無毒主治殺疰惡

鬼中惡腹痛又天行疫癘常以東行桃枝萬本煮湯浴

之佳とゆゑ又日本紀神代紀伊弉諾尊自黄泉走

還時雷等皆起追来時道邊有大桃樹故伊弉諾尊

隱其樹下因採其實以擲雷者雷等皆退去矣此用

桃避鬼之緣也云云又この時桃に名を賜ひて意富加牟都大美

命とのゆゑ古事記上代本紀第十三法ゆゑ又風俗通東海

度朔或作山有大桃樹盤屈三千里下有鬱壘神荼以

食凶鬼名曰蟠桃ゆゑ故事ゆゑ桃を郎鬼嗚到

裏を殺〳〵その惠王を擒うて作〳〵あり○又桃花郎が母よ請て黍
の黍よを造ふし糧よ裹そ〳〵肩途赴くるゆも又本据あり孔子家語ニ孟子離婁篇
云ク。孔子侍坐於魯哀公ニ。設桃具黍哀公曰。請用。仲尼
先飯黍而後啖桃。左右皆掩口失笑。公曰。黍者非飯
之也。以雪桃也。仲尼對曰。丘知之矣。夫黍者五穀之
長也。祭先王以爲上。盛草有六而桃爲下。祭先王不
得入於廟丘聞之。君子以賤雪貴。不聞以貴雪賤。今
以五穀之長雪果蓏之下。是侵上忽下也。もれば桃花郎が
肩途よるる黍を先ふ〳〵ゆるもその気ゆるへ〳〵又按ずるよ拾芥抄ハ巻の末ノ
八種唐果子と題〳〵梅枝桃子餲餬桂心枳腎餛飩固子ホの同ノ
もれば黍よの名目ふる〳〵ゆるると久〳〵又彼桃花郎が黍よを齎して糧と
ふるる桃子黍よの名よ稱へて〇桃よ犬も亦縁故あり李至が桃花犬ノ歌ニ云ク

宮中ニ有リ犬桃花ハ名ナリ。絳繒圍頸懸ニ金鈴ニ云云とあり○犬をりて
敵の城を拔たるゆ畑時能ぐるゆを擬〳〵たり太平記よ云畑六郎左衛門時能
ことやるゆ武藏國の住人ゆ〳〵ありるゆ謀巧ゆ〳〵人を眤ゆ気健ゆをひ
撓ざりれば戰場よ臨ぐるよ敵を靡け堅ゆ当らびとゆ〳〵されば
物ハ類をれ聚るゆ〳〵れば彼が甥よ所ノ大夫房快舞と〳〵少しも恥らざる
惡僧あり又中間よ惡八郎と〳〵鉄肩ゆる大力あり又犬獅子と名をつけ
たる不思議の犬一疋有り此三人のものも商ゆぐよりれば或ハ帽ゆる男よ
鑠を著て足疾よ出立時もあり或ハ大猪よ七ツ物持時もあり様〳〵賢を吾て
敵の向城よ忍へて先ッ件の犬を先立て城の用心の様を伺ゆる敵の用
心密〳〵て隙を伺ゆるに時ハこの犬一吠そて走出敵の寢ハ夜廻も止ることい
竟出て主よ向て尾を振て告ゆる間三人共よこの犬を案内者ゆ
屏を乗越城の中へ入て叫喚ぐ縱横ゆ凝よ切て廻りゆる間數

手の敵軍駭騰て味を落されぬるを見て
（見干巻）二十二○又雉を後者と
ちりるゆゑ名雉を擬したる歌舞事本紀云高皇産霊尊勅
問諸神等曰昔遣天雅彦於葦原中国至今所以久
不来者蓋是国神有強禦之者我亦遣何神問天雅
彦返留之所申也思兼神諸神答曰可遣無名雉亦
鳩問遣無名雉與鳩而往就之此雉亦鳩降来見粟
田豆田則留而不返所謂雉頭使亦豆見落ル鳩是
其縁矣とてより雉の粟田を食て留る彼彼黍をもめでたりと
ひるり雉ハ瑞鳥也その瑞桃を郎が寶を得て富を至るの前象と易
離為雉傳云雉賦云禀性離之正気應朱火領祥云云
雉ハ南方火象○鬼嶋ハ鬼門を表ちられ逆ちる西方申酉戌
りてとられ秋四時を配ちる西ハ秋ちて金気殺伐気主ちびるゆゑ

その意ちと深て且鬼嶋ハ南嶋の摠名ちの赤ち雉の鬼嶋へ到て功ある
ちをひり濡確頸書云雉ノ雄者ハ有冠長尾文采善鬬○
猿の人ち後ひるの和漢その例歟ちねば毛峯ち逞ちて○桃を郎ど
鬼嶋へ到て寶貨を得たりとの為朝の事を擬てひるの保元物語
為朝鬼嶋渡りの段ち御曹司ハ西国ちて紀ち秋調練ちられたり紀を
も損ぜど押上て見給へば長一丈餘ある大童の髪ハ空様ち取あげたる身
ちハもひと生て色黒く牛の如くるるが力を有ち指て云云
亦云宝ちもられば馬穴ち〜その島の勢ハ鵯紀ち為朝ちれをうあひて
件の大猫ち〜本ち有を射落て空を翔るを射殺てすぐハ嶋ち
ちのぐも言を振てあぐ忍る汝ちるも我ち後ちどちの如く射殺をぐと
宣べ皆平伏て後ひり身ち著る物ハ綱の如くるる太布ちの布を面
の亦ちち多く持出て前ち積置り島の名を問ちべ鬼が嶋と左

あれば泄笠の鬼の子孫ひさそひはゆる寶あらば取出せよゝんと宣へば昔正〳〵く鬼神のし時の隱蓑隱笠浮履劍るどりの寶あり其比私のそれども他國へも渡らく日食人のいけ贄をも取り今の果殼盡〳〵寶も失せ秋も人よりて他國へ行とも叶ひどとのふさぶ嶋の名を改んとて〳〵去れ葦麦く生たれが葦嶋とぞ名附るとの嶋俱〳〵七嶋知行したれを八丈嶋のひさ嶋〳〵云云とれい永萬元年三月のゝ〳〵つゝ桃を鼠が鬼嶋渡りい全〳〵とれより出り御曹司嶋めぐりとゝふ

繪巻物世よ行ゆ〳〵ところそれよ擬〳〵めるる物語さへ出来〳〵るゝん○隱蓑隱笠い夫木集巻三十二雜十四信實朝臣へはゆほ〳〵世のうた時のゆれ蓑何ゝ山のゝもゝ〳〵又あゝ集あるゝ部よ衣笠内大臣へめゝれ蓑ゝれゝを山のゝとゝもゝ〳〵よ鬼を行〳〵るゝれが見い鬼の蓑笠ゝゝ

ゝを山の鬼よ比べ〳〵ゝみめゝゝ又回回雜記よ道真准后へ蓑笠の袁

〳〵社頭ゝ〳〵〳〵ゝ相別叙沢近辺へあめゝ〳〵ゝ守〳〵ん神のちゆひゝゝ〳〵ゝ

ゝゝ笠の袁ゝれい素盞烏尊の故ゝを〳〵ひゝゝ〳〵ゝ旅めゝゝゝゝ〳〵ゝ神代紀一書説素盞嗚尊結束青草以為笠蓑而。乞宿喪神云云。乃葉集巻十二。久堅乃雨零日乎我門爾蓑笠不蓑而来有人也誰〇鬼の笠をゝゝゝゝゝ日本紀。齊明天皇六年。秋七月甲午朔。丁巳。天皇崩于朝倉宮。八月甲子朔。太子奉二從天皇喪一還至二磐瀨宮一見夕於二朝倉山上一有鬼。著大笠臨視喪儀。云云鬼のかゝれ笠とゝゝゝゝゝ

童子ホゞ說ところ大りと本文とあるで故ところ拳ごそのとこ異なる
処いわゝ辨ぜざる
中作拾遺物語巻之三云今は昔ゝ巷つゝ日麗るゝりるゝ六トゞるの
女のゝりるゝ虫うちとりゝおりけるゝ庭ゝ雀の志ありるゝ童子を
ゝりゝうちたれゞおりゝ穀をうちをられゝより羽を噛ゝめりゝゝゞゝ
行ゝ烏のゝげをゝりるゝられゞあるゝうゝと取てんとゝゝ此女のそゞゝとりゝ
ひるゝりけるゝゞゝ物ゝゝと小桶ゝのをゝゝ夜いかゝむゝれゞ米ゝゝ伺ゝ
ゝゝゞゝゝゝゞゝゝゞゝゝゝ

もをあけられ食くゝあを一里飛をうごゝく果あり満あとよをぐれと大なる
七ツ八ツをひさごゝもんとゝひゝく肉よりほとをけゝくかたりさそはこゝろく
今ゝらくゝりぬらんとゝくゝれがらくゝりゝりをうゝくらちあゝんとも
まびすとゝくゝりゝあゝゝゝれゝども切あけゝくゝれび物ひと物ゝ入たり何ゝうゝ
らんとゝらんゝゝくゝれが白米のへりゝをとゝひゝけどあゝゝゝとゝひゝくゝ大なるものゝ
ゝゝをゝうゝゝたゝゝあゝゝゝれがたゝゝとゝんあゝゝざりゝゝ萑のちゝゝ
みゝゝとあゝゝゝくゝれゝゝれが物ゝゝれゝゝめゝゝゝゝ殘ゝゝの枚ゝゝをゝれび
ゝゝゝゝゝゝくゝゝゝゝゝゝ

べ雀どもの打ちりて食ふまうれば又うちくしられば打ちうち折ぬ今はもぐり
さくまりうんとおひて猶折たる雀三斗桶よりかくし綱とそげさくらをうどし
て月ごろあれはよるくまりよりれば悦びて外ことりもうればぬらくと赤
とみるらぬいそたぎもつとその雀い猶うち折られぬ月ごろあれたるなるよね
たりとおひりさて十日ばかりあとの雀どもあるれば悦びとさづりる物やらえ
たるとえたるひとどのうをを一つづみる蔡くてひねさればうとうれくとう
て二ところ極てうり出いうもちるくと生たちてひみぐ方よりたる里
見いとあるくもあらどセッハッそうりたる女えさきくてうどもよりの舟う
ちうぐくたるものどもとおひくど我いとうりの女うんさうりあんとうがげよさ
もあらうんとおひうこれい数のとくあれば米ちくとらんとくくへよもらせ
どうれもうらばてうどもがひるう隣の女房い里とうりの人よもらせられもくひ
うどうをちうぐ見いちくこっが行くうれもうひへうもうらうびたうりとうぐ

さくまとおひくく近たうりの人よもらせられもうらもよらでんそ
あぼうかくうるよにうたる物よも似どうるどのかうまくおかうどふ
食とおひる人くもうどもうれも物つたくちうどの祝よどうりの人どもこ
ひそんどくくまのつゆとおいるる物をうらせたうどあるあそ居雪だあを
けんのうちよりたるも物をつたうどひあひくく死ぬべくうそあれと鳴くうち
ひちくめんとおひくまんばぬの女をうちばあるうる先もこる物ばえどそれ
ちおこと物ちりあひたりいふうひあくとあるをね二三日も過ぬればたれくもおかる
ほりたり女おのかうこる米みるうんとくける物をのそうたくうへたるうあ
かりるるあり二おひくく残るのをうばこるつりけけくあたうりさて月ごろ
ばいうくうりぬうんとそうくいるん虫の桶どもうくうやよ入りうまれば
歯もうたにくく耳のりとちうぐひとをえをくく桶をうどそうくれば
ちちかりうどうとうげうちるいうど出くく目ちるともうべひと身ようをそさて

蛭 蚓蚯 石龍子 蛇 黄蜂 蜂 蚯蚓 蛇 蛭

さてども女ゆえにもおぼえど兵衛のとぶれめうぞとおもへてもだ
ぜ〜ぜくちゐんとうの七ハッのひさごうりそそちの毒虫ども出〜〜すぐもをも
らひ女をびさ〜とろ〜とうり雀の猫をうち折らんて〜ねうとおひて〜ろうぼの
虫どもをやうらひてくひうりるとうりの雀ハりと猫折ふて〜烏の命とうぬ
べうりしをやるひいけたれがうれとおひるるりされば物うちやこいをうぶたと
ゆうを
崇峻十六孫又雀の松ぐらとゆう繪巻物もこの話を仏ようをそれのハ雀の死ようるる
諸島の吊ようをかけてこれハ神代紀ようの天雅彦の死〜ふた喪鳥を以任事せとあるを
おおうをそ作るる歌一説ようの当内侍の作をと
そうのぐれの卿時の内侍のやたがねぐ〜 めい今れ童どもいとと〜作をうへたるとを
ろのり腹ろろた老女のあうひ客ようたりうんとく鹽のうちさあたたりる粽をの
薄ある女房のうひたりし雀の嘗たれがうち腹たちて〜ひしとて〜雀の舌を切て
そのち手をねとのつを舌切ちれたる雀のいりぐらたて部がをあらんめくいとの物
語ひと拉〜さて〜隣の女房うぐめひたる雀めやうち〜て〜舌を切られたりと
ゆうて〜めうて〜〜悲〜とおひて〜夫とうを雀のやくを忘らんとて野とも

ろうぐ山ともいうぐうぐゆうぐうぐ祝ようとうして雀の棲ぬうぐもあてのめ〜て
雀い主のりるる夫婦のたぐゆうるうしうぐ雀のうちへ籠引の五十年
情ふて〜をろ祝慶びゆえ汐さうるうぐ不ちたちぐ〜ようぐそうへて
めの雀ゆうぐもうちどの雀どもようをとと思ほ〜盃ぐんるが雀ぐうとい
うぐをぐを〜て〜終日ゆそうる〜けうじてぐり四ようれすんとうる行よういう
ありうりうそうのんとうゆう雀づら二ッ出〜て〜ありたを方をやとりあふうたをや
よううとぐたと向ようを吾俤老たをぐ負て〜やうるようたりとて便ようえれ
うたをのうたんとゆうがさいとそ〜めうたりづらをうりうりれがとれせようあ
て〜夫婦家ようつをとうるうあけてうんとて〜この葛籠をあけてえんば
金銀珠玉巻絡ぐどのうるうあをやうをすうれがおさま〜とおひてられども
どれども〜たもどたちまちるそのいへ富てたりたへるいりりりめ
雀の舌さりたる老婆とれをやうるうち母ち〜ぐおひ〜ぐ籠の女房う

雀の棲をたづねみちもなきものなれども同定なくまれも徒にうんとく
たづねとりぬ雀又葛籠二ツを出すこれをあらためこれやとうめあらためを
とべたと問よりは葛籠はそれほどに寶も數おほくありぬべしとおもひて
ありたのもをあらうんとくしたるにつくづくしたるあひつく思ふに石をおひたるもうをて深
も堪ぐされどあつとびたるのぶいよりそ出まてまて蓋をひらたくされば内
うりことばどろくしたる鬼ども鞭をどり出てまて老女をころひ殺したりこれ
艶氣を葛籠より出をあへたるなれど雀はさる物なりべうもあらぬ狐なるぞ
人をたぶらかすを雀の棲よりたづねあたくそのりてあるよりあるとうもいろ
よりたるこの字を拾遠よりえんたる雀の物がたりは根ぐ〳〵おもりて善をも
をあ悪を懲らん意も又ゆく〳〵まそのうち多るどうりのもせる教を人
のある所よりあるをたらふくて賣りのあり人よ教さんとてとりたるものを
教さん雀の德をうち折〳〵ものうひ生て〳〵るうちたるぶ如〳〵さんど彼

放鳥とうのものなれなれ云云もおれば罪あるさんなれとらと
を塗德ありとありはたづり字治亞相は楊寶が故事をくはくしたるて雀
の物がたりを似をあへるるぞ〳〵搜神記云弘農楊寶年九歲
至華陰山見一黃雀爲鴟梟所搏墜地又爲螻蟻所
困寶愍之取歸置巾箱中采黃花飼之百餘日羽毛
成朝去暮還一夕三更寶讀書有黃衣童子向寶再
拜曰我王母使者蒙君拯濟今當使南海不得復來
以白環四枚與寶曰令君子孫潔白位至三公如此
環以下係寸續齋諧記寶生震震生兼兼生賜賜生彪四世三公
果應白環之兆云云切雀の根本又今の歌教はよりる雀が
どりとうのりにも根〳〵不あを周成王ネ年貝ネ國人獻翡雀
周公命返之と云述異記云唐の玄宗の時象馬あるる

是夷狄の獻ずるところその馬節あり（天室送事参考もべし）かれが馬も雀も教ふべ容踏のものなれ又多く欲しがるを雀躍と称するなり書言故事に喜勝曰不勝雀躍出莊子注如雀之跳躍とあり是彼どもいつて雀をとりの戯を作るなるべし雑より鶏が雀いろく人を馴るゝものゝ夫木集（巻ノ廿七 雑部九）土御門内大臣 いたづら雀のひるをあひもなくそぐりを祝ひあるべしなりのを又俳諧師嵐雪が發句に「えりやられて雀の物ぐるひ」げに雀の物ぐるを言ひなりのを公治長が雀語を辨ずなりとあるは論語疏に云へたるもの、河西左守楊宣り雀語（親ニ雀ヲ為ル鵲ト）をきれをの説い益都者舊傳より出るなり当時の寓言なり

㊐ 花咲爺

童話に云老夫婦慈悲をなりて犬とともるなりり飯なる犬の鼻くゝところを掘りてくれども金を出そなれ又爺が隣の腹ある夫婦ありてこれを羨みこれをまねして犬を借りて大路を引あるくに跳くとるをこれ犬を殺し道次なる小松のもとに埋たりしよその松俄に枯るなりの爺られを臼に挽て麦をもど蒔に麦ハ底なりこれ物いふ白のなくに盡るところの隣のをと又これを羨み彼臼を借りて麦を蒔に麦ハ芽出ず碎けく臼にあれば臼を打ちぶれつく薪のなり爺亦彼臼の灰をとりて枯木の花を咲しに国の守なり金銀衣裳をもどめなりの恩賞あり花咲の爺と云さる隣のをとこ又これを羨み彼灰をとりて枯木の花を咲せんとて灰を撒て枯木の花いさぎよくその灰国の守の眼中のよれば後者どもをもなるなりのとの灰なりとまどのくうち懲らしめ忽ち怒を傷られ血を塗たく辛じて逃てゐるを妻なりる女門なり夫い守なり紅の衣などを被せ申すと悦ぶ行く近くなるまくれば衣もあらで血に染たる

夫人ゆゑ〳〵病ゆゑ〳〵遂よりて〳〵すりたりとのみら
この物ものうらもものをするものを誠るよりゝるれが若の雀のゆうりとん
〳〵さと種この草紙のうちらをを彼とをとをを〳〵一條の物語を綴を
物語 巻二 十三 ゆ云今いもし叅河國の郡司妻を物をりてふをを蠶雞
ゆる狗ゆゑ犬のあゆ報ひをとゆゆ郡司が妻の蚕のゆを似をゆゆ〳〵今昔
さをを〳〵糸ゆほくゆうけりをゆるゆりとの妻が蚕ゆるゆゆ皆死ければをを
うをみ〳〵うををゆゆをゆりゆをけれゆゆれもゆ〳〵くんゆゆりね妻ゆ後
者ゆゆゆ

其所之至桐陵岸枸杞藪中隱而不見但餘紅線在
外即掘枸枹藪乃得根株如蕓犬狀特歸蒸之芬香
滿室仙翁食之繇此仙去類書○犬の精の入りたる松の灰を
りく枯木の花を咲せしうの所見うの吳の朱休が犬梅花の教をうう
てその家の犬を示せしうのあり述異記云吳太皇の時朱休之家
犬狗曰言我不能教聽我教梅花今年故復可明年
當奈何逐殺其犬明年休家人並死卷ノ下見于第十九張○柿木自復
春夏のうの楊柳觀音のうのようていの欲又法華經藥艸喩品我
爲如來兩足之尊出于世間猶如大雲充潤一切枯
槁衰生云云又梁高僧傳釋法雲姓周氏陽羨人云云
當一日講散感天花狀如乳雪滿空而延于堂內云云
續齊諧記京兆人四月真兄弟三人共分財所居堂前

有紫荊一株華甚茂共議破而爲三待明截之忽一
夕樹即枯死眞見之驚謂諸弟曰樹本同株當分析
便憔悴況人兄弟乳懷而可離豈人不如樹木也兄
弟相感而更合樹隨復活亦應之遺事明皇遇祿山
亂奔興西幸林中枯松復生枝葉蕊蕩宛若新植
者后肅宗不內難更與唐枯松再生祥不誣矣亦王列
世負列仙全傳延祥觀枯槐一株丘處機以杖遶而
繫之此槐生矣及今榮茂云云とれら枯るる木の更に茂る或は天
らを花のふるるうをのべて大木集巻之二十九後二位行家卿へ埋木のかれる枝
も花さそ〳〵昔よりのうく咲れるらら雪見へ雪をもよりてうこうたりうり○と
ようのそことが血を塗まうく咲るを妻の女房てようとうく紅の衣めりてとて也
そそとこれ〳〵ひ〳〵とりうの福富の草紙とりの繪巻物のかりしかを仏

たをたちまちに花咲の義八福とこの義を思ひうたる狐（）大いらくその主をこ
すのく和漢故事毛拳を追ひあらぐ賛茂社百首のうち慈願和尚一ぢひ
をのの人ふるくあれをあられよのぬのゆをちりぬる」げに大いらく主の義
をちりのこ人ふ撈ぎりやうとれアや

㊇ 兎大手柄

童話云昔因夫のとり老たるゲ山因耕をありりて妻の嫗飯を送りもてる
ゑ狸られを竊くらひつ義腹をうく歩くその狸を生拘て家に牽ゆく
ゆ妻ゆ梁よりてあげたりさて妻の嫗ゆ内ちの狸を羹みて食ふべ
らくとのへてこぶゆるを行ぬくとのひて亦革野ゑ出づ嫗麥を蒔て歌をうたへ
狸哀てゆのゲ命ゑ助ぬゲ代ア麥を蒔んとのひと不便なれば素をと
ゆてくゆうとほどゑ狸忽ゑ嫗を噉らゆ〜てその宍を羹とうぎく化て嫗ゑ
なりてをり義革野ゑ出ゆアて彼羹を啜らんとする狸本の形なりて

嫗食の義ゑ竈ゆなる骨をうんぢて笑ひぼく外のゆ〜ゆ走り出く失
ゆうんぐ尋ゆ箒を擲嫗が骨殘えて逃てらぐりうゆ〜ゆてらの山ゑて狐
兎ゆりりアて義ぶ〜〜踊哭声をはて〜踊ひゆぐさゆ音屏嫗の仇を報ひ
てんちつ豆を熬ぬくとく熬〜ゆられを煎ゆりりて〜山ゆとくゆりてゆくて
狸その帝ゑ〜りゆ〜〜ゆられゆも反一拔ぐゆ〜ゆ〜ゆらゆ兎ゆはゆりなる
ゆゆり向ゆる山ゆて〜ぐ柴を負て〜ゆらぐとゆ〜ぐらゆゆ〜ゆ宜ゆりゆゆ〜ゆぐ
その豆を焙さ〜ぬゆねとゆらゑ乞ゆりれど柴を負〜て後ゑとゆ〜とゆぐる
ゆる柴を負〜ゆんを生ゆ〜ひそゆゆる燧をぐり出て去ゆうちぼく系
狸その音を怪ゆ〜ゆれゆ行ぐゆと向ゆ〜ゆ〜ゆ山ゆりと答ゆその火ゆ柴へ
燃ゆ〜ゆたりゆれゆ狸又向兎ゆるんぼゆ〜ゆゆと答ゆる形ゑ火ゆ〜ゆ燃ゆりぐて
狸の背を燒ゆりれゆゆ〜ゆ叫ゆひゆ〜ゆゆ輾ゆ辛ゆ〜ゆ〜ゆ落ゆ〜ゆ逃ゆ〜ゆ
兎又味噌ゑ蕃椒をすりゆぐゆるを膏薬ゆ〜ゆ〜ゆ笑を塗ゆ〜ゆ火傷の薬

ゑりを賣けを狸い背を燒爛さんれくてんをべきの人折すれべよ人茶ゑりんを
ゑひくく背の大傷へはけさをいくぐ爛たる痍へ蓄椒を塗附られほそりて
痛をのふべくもめくべををら輾び狐ひくく泣をめぐをるくさを世日おようを猛
く狸の火傷愈たり兎又舩を造る狸られをえくくその舩何ゑを同く奥
ちんとゑををを欺べ狸うらすくくゑをものちの逆のくぐゑい疎ゆり
うれい土ゑくく造らんをを土舩を造をて兎ゑりをゑも澳のくく溝ぐをを
狸の舩沈をを忽水ゑ粥ゑを兎い檝をををのべくられをうち殺くゑゑが
孤ゑ嫗の雙を復ひくをいの事
按をゑゑ抱朴子。山中卯日。稱丈人者兎也ををうられゑ因く
兎を田翁の友をゑるゑの歌○亦田翁の狸を主拘くをいのゆい韓子曰。
宋人有耕者。田中有株。兎走觸之。折頸而死。因失耕
守冀再獲兎。爲宋國所笑。をいゑ兎を狸をくくその兎を翁

が友ゑ作をを出たるゑるゑ〜○狸が蠅を羹〜〜ゑ翁ゑすすめをこゑゑう
い唐山ゑさ風例ゑ通ゆいい我。君子國の風俗い慈善ゑ〜〜人肉を屠り或
い醢ゑ〜或い羹ゑ〜〜人ゑ勸〜〜ゑ絶ゑ〜ゑの〜史記齊太公世家。
正義曰。管仲曰。願君遠易牙豎刁。桓公曰。易牙烹其
子。以快寡人。尚可疑耶。云云。又黥布列傳曰。漢誅梁
王彭越。醢之。盛其醢徧賜諸侯。至淮南王方獵。
見醢固大恐。又殷本紀。注。正義曰。帝王世紀曰。紂囚
文王。文王之長子曰伯邑考。質於殷爲紂御。紂烹爲
羹賜文王。曰。聖人當不食其子羹。文王食之。紂曰誰
謂西伯聖者。食其子羹。尚不知也。又衛人醢子路。聽
之。孔子聞之。謂曰。子路。聽之。紂曰誰
ゑゑゑ

傳ニ云。蔡邕字伯喈。陳留圉人也。性篤孝。母常滞病三年。邕自非寒暑節變未嘗解襟帶。不寢寐者七旬。母卒。廬冢側。動静以禮。有兎馴擾其室。旁云云。如彼兎の田螺が妻の喪を吊ふてその家より出れると作る事の趣相似たり○さて月中の白兎藥を擣とゝの説より根拠なく兎謀なく火傷の膏薬を賣と作る傳云擬天問。月中何有白兎擣藥。古詩採取神藥。

高山端白兎擣。蝦蟇化奉上。陛下一玉杯。

○兎謀り

〇兎謀り

〇兎謀り

〇

○狸の腹鼓へ始るく〻うとうつるとし夫木集雜四寂蓮法師へ人さとゞ撞も音ちゝ山寺よ狸のこゝそ伝ぐこうちけれ

追考 巻之一十二獸の項よ兎をうと唱ると十二支こ限ると歌あり

とのこゝ続とすゝとつゝ[illegible]が再按ずるよ中葉らを十二支の唱をうけるく

[illegible]うの花うのけすゞちうよ體よるく旅たる歌ふれどうのちうのかゝ

すゞ思ふすゝとの不羅欲へ[illegible]ずよ物とうのけのいるちるらん月の桂のゲ

をたゞゝとと定氣ふゝゝゝゝ合れ俗の常言よ小事をうのけりゝ突た

ゝ花のゝゝとゝるも兎の毛ハとと細ゝのすれいすり又楊鑪の和名を

宇豆木とゝひ花をうの花とゝゝ而くゝと兎の毛ハゝれが此名ある欧裏義

抜ゝ流波花と書ゝゝも而兎波をゝるのゝゝすゝ兎の花ゝり個へを

を上畧ゝゝゝとのゝ唱るゝ十二支のゝゝゝいゝ考證をゝゞ系ぬべ〜

九 猿猴の生擔

童話云龍王の次女病ゝ猴の擔の炙を嚙ゝゝ亀を嶋山く遣〜

猴を騙ゝ見劔へ誘引ゝ門卒ゝゝる海蛇その謀を漏ゝ彩る

猴ゝ偽りゝ〜ゝ擔へ乾〜ゝ嶋山ある林ゝあゝゝ放ゝゝとしゝ

携ゝ来ゝゝゝゝゝゝゝ脱去ゝゝゝとゝゝ本文へ祖庭事苑ゝえゝゝ

此一條へ予近属ある物ゝ引ゝゝゝゝゝゝゝ

説。我心留於沙羅樹上。不持將行。善友還回放我取心得已却来。於是虬復水岸。猕猴努力跳上大樹。甚虬多停見猴不作。而語之言。善友汝速下来同至我家猴説偈言。汝虬計校雖能寛。而汝心智慮甚拙劣。汝但審諦自思惟。一切衆類誰無心。虬六度経作鼈見于

雲門禄作今童の説ところ大りさだらん虬を鼈とするのは六度経のようなこと海蛇が機密を漏らしたのは蛇足の説のようなれども世俗生膿をいたさもと喝して菜刎に用るところ活きぐる物の膿をからざれば效験なしとかりつの醫をそ仁術のようなれども殘毒の不約をかとせん生は生熟と對してはのを初見る人は生人とかつも熟ざるの義と疫癘の方書は生人往来ひどいことあるを思あらんだるに水地黄は熟地黄あるは生地黄と對してはつを生字を□キと續て俗は生漉生酢などのは生の物を一滴もすぐるるとのキも

又生熟の生のようなれば生膿は乾柿とでるものをいたさまも殘は絶て方書はなくとする

⑩浦嶋子

昔より童子の話柄とする浦嶋が子のは原日本紀に載られたるようにらざるものは今按ずるに世にいふ浦嶋が玉手箱といふものは陶淵明が搜神後記にえ。袁相根碩等が物を附會たるようん陶淵が本文は脆囊といひとの脆をまて囊を箱とて玉手箱と名付けたるゆえあらんや亦は寡美の詞は又命を正の緒といへば魂出匣の義歟古書にそ玉匣とかりてまるるようにはは辨ぜ

搜神後記云。會稽剣縣民。袁相。根碩二人獵経深山重嶺甚遠見一群山羊六七頭。逐之経一石橋甚狹而峻羊去根等亦隨渡向絶崖崖正赤壁立。名曰赤

嶮。上ニ有レ水流下。ハ廣狹如レ匹布。劈一人請之瀑布。半径有
山ノ穴一如レ門。豁然而過既入レ内。莫平敞。草木皆香。有一
小屋。二女子住甚中。年皆十五六。容色莫美著青衣
一名瑩珠。一名□□。見二八至。忻然云。早望汝来遂
為室家。忽二女出行云。復有得婿者。往慶之。曳復於
絶巖上行琅琅然。二人思歸偕去。歸路二女追遂。已
知乃調曰。自可去。乃以一晩囊與根等語曰。慎勿開
也。於是乃歸。後出行家人開視其囊。囊如蓮花一重
去一重復至。五盃中有小青鳥飛去。根還知此帳然
而已。後根於田中耕。家依常餉之。見在田中不動。就
視有殼如蟬脱。見手巻一第三條

とれ浦嶋がこのゝと同年の秋ありとの晩囊
のうちに玉手箱ハ如ゝ玉匣とあり如ゝ玉匣と読ゞ
乃巻集巻十一問答歌作者不詳級子八師不吹風故玉匣開而左
宿之吾其悔矣。玉匣いあけるとのうち浦嶋がこを緑ど
るよわらねども玉匣をタマクシゲと読證ともろ〳〵もろよ後の草紙浦嶋者郎の
の縁起ホ
まへまへ箱とくまへ箱のあるよりの晩囊の義欲又中箱の為欲私名鈔
中ニ箱者盛手拭之器也俗云打乱匣とええたりりや史ま載ろくとも浦
嶋がこの事夢野の鹿のゝのゝ凡智をろく〳〵量ろくれい實事くもかゝえど
いつへも今も人いたゞく新奇を好むゞ世の習俗ゝ彼ま傳とれま記とまくま文を
飾ることもよゝゝ〳〵古事記雄畧天皇の條ゝ浦嶋がこのゝとえゝ日本紀
雄畧紀云。二十二年。云云。秋七月丹後ノ國。餘社郡。管川ノ
人。水ノ江浦嶋子。乗舟而釣。遂得大亀。便化為女。於是
浦嶋子戯以為婦。相逐入海。到蓬莱山。歴観仙衆。語
在列巻と記され〳〵ハ史ハ後ノ為ものゝれがゝ日本紀ハ

元明天皇の霊老四年より勅〳〵撰せしめ給へり續紀ふそ舎人親王
諸儒とこれを撰集〳〵めんと十伝へたり（日本紀口授参考らべし）ぬく当時そのあり
くも天長二年の後うらぐへ浦嶋がよの往方を誰りんたらんゆえ亦りて後
ようやく 雄略天皇二十二年秋七月のゆくえとよ世人もこれをあらあも
雄略の御宇より當時の史を作らしめんまい浦嶋がよの事を載らるくよはしな
かりんかりうあるくらのよ 聖武 孝謙の御宇うえ 嵯峨 淳和の御時まで
ちゞ〳〵遣唐使をたてられ 本邦の人彼へ物学びよりたるものをこゞ彼
衰相根碩が奇談寓言を伝へ伝へるものを作て殺〳〵
當時の話柄とちゝを日本後紀より記載らるる後より 雄略紀より追書せられたる
もの〳〵ぬり今更より管見をりく〳〵元慮より測りかるれるのゆち耳を信ぜざるも
のとかもの疑ひを送ちえ博物の君るよ向べ〳〵
故事敬云。淳和天皇御宇。天長二年乙巳。冊後、図余

他郡、人。水、江、浦、嶋子。此、年来於船到故郷。爰問邑浪
没。物皆不昔日。山川相遷。人居成淵。于時浦嶋子。
四方訪之族。無散知者。但有一老嫗。浦嶋子向云。汝
何郷人乎。亦知吾根元哉。老嫗答曰。吾生此郷而百
有七年。不知敢君事。但吾祖父伝云。昔水、江、浦嶋
子。好釣遊海。永不還。其後不知幾百歳云。浦嶋子聞
此、語。即雖欲還神女處。敢無然。于時慕神女。周彼所
與之玉匣。紫雲出。後匣。起上指西飛去。但浦嶋子辭
郷之後。経之百年。還故郷。甚容顔如幼童云云（曲亭曰云云朝臣中臣丈人
訓黙不稱字義者不得已也）

一此、事浦嶋子、傳云。雄略天皇、二十二年。水、江、浦嶋子。
獨棄舟曳得亀浮於波上眠於舟中之間。聖亀変化

忽作美女。玉顔之艶。南威之美見于戰国策第七魏惠王策障破而失魂素質之閑。西施掩面而無色。眉如初月出蛾眉山。嚬似落星流於天漢水。纖軀雲鬢散暫留。軽體鶴立將飛未翔。浦嶋子（一本無浦字）問云。神女有何因縁。而化来哉。

神女云。妾是蓬莱山之女也。不死之金庭。長生之玉殿。妾父之居處。父母兄弟在彼金闕。妾在昔世結夫婦之義。而我成天仙。生蓬莱宮之中。子作地仙。遊於澄江之波上。今感宿昔之因。来隨俗境之縁也。洹向蓬莱宮。將遂曩時之志。願合眼合眼（一本作眼）嶋子唯諾。隨神女之詔。須臾之間。向於蓬莱山。於是神女與嶋子携到蓬莱宮。而令嶋子立於門外。神女先入告於父母。而後共入仙宮。神女衣香馥馥。似春風之送。百和香飄。聲錚錚。如秋調之韻。萬籟響。嶋子已為漁父。唯為釣翁。而志気（一本作気）高尚。凌雲稱新仙。存強弱得仙。因徒甚宮。為斡金精玉芙敷丹墀之内。瑤珠珊瑚満於玄圃之表。清池之浪。芙蓉開脣。而發榮。玄泉之涯。頭蘭菊含咲。不凋。嶋子與神女共入玉房。薫風吹寶帳。而羅綺一本作之添香翡翠簾。寒而翠嵐巻蓬莫。惟閑而素日射堤。朝服金丹石髓。暮飲玉酒瓊漿。瓊漿一本作環漿。九先芝草駐老之方。百節蒲延齡之術。神女（神女一本作妾非）漸見嶋子之容顔。累年枯槁。逐日骨立。定知外雖成仙宮之遊宴。而内生舊郷之戀慕。宜還故郷尋訪舊里。嶋子答曰。久侍仙洞之筵。常嘗霊薬之味。何非樂哉。亦非幸哉。抑神女為天仙。余為地仙。

隨」命進退豈得」違」旨哉。神女興送玉匣裏以五綵之錦繡以萬端之金玉誠嗚子云。若欲見再逢之期莫」開玉匣之緘言訖□約成分手辭去。嗚子乘舟眠目歸去忽以到故郷澄江浦。

うれい後紀の麁をうけつゝ張文成が遊仙嵐之擬つゝ紀之。延喜の比の文人の述作歌或い兼題卿筆之とり寄ぬゞ浦嶋がよのゝい扶桑畧記も載たゞ故事後之紀さゝ有と異説ゝ日本紀之因ゝ紀られたゞそゞれ

ゆゝもとのゝみゝ水鏡ゝもんえたゞそゝ扱ゝ之書之就ゝゝゝるべし

萬葉集巻九。絲水江浦嶋子一首。并短歌 作者不詳

春日之霞時。水江之浦嶋子。墨吉之岸。水出居而。釣船之。得本良布見者。古之事曽所念。水江之浦嶋兒之。堅魚釣。鯛

釣。殺。及七日。家乎毛不来。而海畏乎。過而榜行。海若之神之女。水。邂逅。伊許藝越而。相語良比。言成之賀婆。加吉結。常代乎至。海若。神之宮乃内隔之。細有殿。二人入居而。老日不為。死不為而。永世乎。有家留物乎。世間之愚人之。吾妹兒乎。告而語久。須臾者。家歸而。父母乎。事毛告良比。如明日。吾者来南登言。家礼婆。妹之答久。常世邊乎。復反来而。如今。相跡奈良婆。此筥。開勿勤。常。曽己良久乎。堅目師事乎。墨吉乎。還来而。家見跡。宅毛見金手。里見跡。里毛見金手。恠常所許乎念久。後家出而。三歳之間乎。嘗毛無。家。滅目八跡。此筥乎。開而見手嶋。如本来。家者有登。玉筥。小披乎。白雲之。自箱出而。常世邊。棚引去

者。立走。叶袖振。反側。足受利四管。頭消情失奴。若有之。皮毛皺奴。黒有之。髪毛白斑奴。由奈由奈波。気を倍絶而。後遂毒死祁流水江之浦嶋子之。家地見。

反歌

常世邊可住物乎。劒刀。己を刀柄。於曽也是君。

皇后宮大夫俊成

千載集賀部

りくらたび浦嶋がこはめるとも親姫射の山をとなりあるべし

夫木集雑部当座百首中浦嶋子　参議為相卿

ことのはもめくらぬ浦嶋やさてのえの浪よらばなん

なる故事はめりとしてく損ずるくなりとてく益もあらじ言を極てその虚実を論ぜんい風雅の本意よりそもくよりは仏もれど大めてこころ得てもあるべき歟陶潛が桃花源記陳翰が槐宮記張文成が遊仙窟記などの如きの

唐山の浦嶋がこのかの世俗は只耳を信じて附會の説をとらんちの武義國橘樹郡神奈川の驛なる西蓮寺に浦嶋を祀る塚と唱るりの墓に縁起一冊あり中葉事を物ひりの絢引とる浦とされを常とるよりて殊國杉本なる大平権現の伝称源左衛門を祭れりとの類なるべし

この餘鼠の隠里は述異記に出てそれは崑崙とあり崑の塚入とりの後草紙は寛永のころ既に行れしは崑の革紙の中山三柳老人の醍醐隨筆上巻張にはえ伝へわくる類の物語は世説巻物にあり伝るを後に粹にのがちくるこん彼繪巻物と唱るものは繪合の餘彼なるを源氏物語絵食の巻のへらいぐくこんと物るくこをあるくこのあれど鎌倉将軍の時に盛なりし鎌倉右大臣とけるくかくくこを陸奥前後の古戦の画屏を弄ひぬるくり東鑑に元亦同書に建暦二年十一月八日於御所

繪合のもつえ仁ゝとの自廣え献覧の繪ハ小野小町一期盛衰のゑを
図し朝光進覧の繪ハ本邦四大師の繪世数巻の中ゑの両部頻ゑ郷種
愛ゑ四のびゝゝび老方を勝と定らるゝのち足利家の時ゑ及ゝ貴へゆ
公子繪巻物を尋びゆゝとゝゆゝゝゝ

なりといふもすべきものなる書籍どもあるをりをんけられんもうくさられ
ぬるをもつその書を就てこれるべく抑その藁を畑にて注する
ことなりとうく書を引て諸説をあつめたるべきの本文を漉らざるも
あるを僅に五四だのみりよの巻を草〳〵果たれば見ひらちちつゆもの人惑とる
べきあるのんとやれやくまれやるうるべどを注でんとをく和漢の志傳を引
用るに紙を金にて弦を玉にとるひとをくとてろあるべるに笑るべきれど彼
兼好が徒然草にて後に言の葉さくあるを野槌紙槌うちにけり
巻のりもくまくたればあるさるゆりやとて波とうくの見ひとりんくにふも用
ひ侍べるものなり

奏石雑志巻之五